



























































# 国定公園(特別保護地区) 住用町マングローブ解説板

マングローブ(紅樹林)とは、熱帯、亜熱帯の波の静かな海岸で満潮時には海水にひた  
り、干潮時には外気にさらされる河口や、塩沼地の泥土に生育する樹木の群落である。  
主としてヒルギ科のメヒルギとオヒルギからなり、住用川と役勝川の合流するデルタ地帯  
に発達している。海水の干満する特殊な環境に適応するため、樹木の細胞液は浸透圧(濃  
度)が高く、葉は多肉でクチクラ(角皮)が発達し多量の水分を貯え蒸散を防いでいる。  
葉は通気組織が発達したくましくひろがり、果実は閉果(熟してもさけない)で、種子は  
果実が樹上に着生のまま発芽し、枝から落ちると泥につきささり、葉を出して生長する。  
周辺には、シャリンバイ(バラ科)やハマボウ(アオイ科)の他にサキシマスオウノキ(ア  
オギリ科)ナンテンテンカズラ(マメ科)等南方系の樹木30数種が混成し、特異な群  
落を構成している。マングローブの林床には、甲殻類のオキナワアナシャコの営巣による  
円盤状の土塚や、泥に生息する二枚貝類のシテナシジミ等も見られ、興味深い環境である。  
このように約70ヘクタールに及ぶ大きな群落は、日本列島における大規模なマングロ  
ーブの北限として極めて、貴重であり重要であるばかりでなく「奄美の宝」として、永遠  
に保護したいものである。

奄美市 住用町





































